

授業分析に基づく自発的 output 促進の筋道

大分大学大学院 中田優一
大分大学大学院 奥田 宏
大分大学 柳井智彦

1 はじめに

一般的に、英語の授業では教師の発問に対する生徒の答えは、短く少量である。

(例1) T: Does Ken believe what she said?

S: No, he doesn't.

(例2) T: Who is talking with Ken in the classroom?

S: Mukami is.

(いずれも実習生の授業より)

ところが、次の例(ある授業ビデオより)では、教師が一人の生徒と下のようなやり取りを持続させている(下線部は発問)。中1の授業である。

T: Did you watch, did you watch the speed skate game, game?

S: Yes.

T: Yes? Yeah, he is a very good skater. Yes, I think so, too.

S: Very exciting.

T: Yes, very exciting. He is, his skating is very cool, like this. Very very nice.

S: I think so, too.

T: Mari, can you, can you skate?

S: No, I can't.

T: Uh-huh.

S: And, but, I can ski a little.

教師の1つの発問に対して、前半では生徒の発言(turn)が3回、後半では2回続いている。つまり、1つの発問をきっかけに生徒が自主的に話を発展させるために、会話がはずんでいるのである。このような力こそが「実践的コミュニケーション能力」の重要な一側面ではあるまいか。

本稿では、以下の3点を検討する。

- 1) 中学校の英語授業ではどのような種類の発問がどのくらいの頻度で使われているか
- 2) 発問の種類によって、応答の量(turn数)に違いがあるか
- 3) 訓練によって、応答の量は増大するか

2 教師の発問と学習者のレスポンス—先行研究から

2.1 Teacher Question の種類

教室における interaction の典型は教師と生徒とのQ&A活動であろう。この活動のうち、教師の発問(Teacher Question)については、これまで様々な観点から分類がなされてきている。yes/no 疑問・選択疑問・wh-疑問のような形式上の分類を始め、procedural, convergent, divergent questions 等の機能上の分類(Richards and Lockhart, 1994)もある。生徒からどのような応答を

引き出すかという観点からは、Long and Sato(1983)の分類が特に重要である。彼らは教師がその発問に対する答えを知っていて特定の言語形式を練習させたり事実を確認させたりすることを目的とする質問を Display Questions (以下 DQ)、教師がその答えを知らない発問を Referential Questions (以下 RQ) と呼んだ。

DQ の例： What's the opposite of "up" in English?

RQ の例： Why didn't you do your homework?

(Long and Sato,1983 より)

本研究では、生徒の応答発話量の伸張という観点から、DQ と RQ という分類法を採用し、実際の授業における使用状況、引き出される応答の量をまず分析する。

2.2 DQ/RQ の使用頻度と学習者のレスポンス

前述の Long and Sato は、教室において教師は DQ を RQ よりも多用し、その DQ の割合は教室外でのネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーの会話における DQ の場合よりも高いことを確認している。また、Brock(1986) や Nunan(1987)は RQ が DQ に比べ、学習者からより長く複雑なアウトプットを引き出すことを示した。一方、Wu(1993)の東南アジア (香港) における同様の研究では、教師の RQ に対する学習者のアウトプットは DQ に比べて量・質共に優れているとは言えず、interaction には文化背景が影響しうることを指摘した。

3 日本の英語授業における Q & A -ビデオによる授業分析から

3.1 分析の目的

わが国の英語の授業を録画したビデオによって、以下の 2 点を検討する。

1) 教師の DQ と RQ の使用頻度

2) DQ か RQ かによって学習者からの応答量は異なるか

2) に関して、今回の分析では 1 つの発問に続く学習者の turn 数を測定した。冒頭のビデオ授業記録に見られるように、1 つの発問に対する生徒の自発的アウトプットの量は turn の数として現れやすいからである。上記の先行研究(Long and Sato, Brock, Nunan, Wu)では教師の 1 つの発問に続く学習者の 1 回だけの発言の語数や統語的複雑さを測定している。それに対し、本分析では学習者が 1 つの発問をきっかけにして教師と協同して自発的に会話を発展させる様子は turn の数に表れると仮定して分析を行った。

3.2 分析手順

(1) データ源

ベテランの日本人教師 6 名による中学校の公開授業を収録した市販ビデオ (6 時間分、1990 年から 2000 年の間に収録) を使用した (注)。

(2) データ収集

ビデオより、教師の DQ 及び RQ に対する生徒のレスポンスの場面をイベントサンプリングし、1 発問ごとに生徒の答えをカード 1 枚に記録した(下記のカード例 1,2 を参照)。DQ か RQ かの判定、turn の数の決定は、筆者のうち 2 名が行ったが、事前の打ち合わせ、2 名でビデオを見て再度確認という手順を繰り返し、できる限り誤差が出ないようにした。なお、データは英問英答に限定し、日本語の Q&A は除外した。

(3) 分析単位

教師の発問 1 つに対する教師と同じ生徒とのやりとりを 1 単位とし、単位内の生徒の turn 数を数えた。したがって、同じ生徒に対して異なる質問を教師が発した場合に新しい単位とした。教師の発問は DQ、RQ のみを対象とし、それら以外の質問(comprehension checks, clarification

requests 等)は質問とみなさない(カード例 2 参照)。

《カード例 1》

T-Q	Mari, can you skate?	
S	No, I can't.	
T	Uh-huh.	
S	But I can ski a little.	
Display / Referential		(turn の数) 2

《カード例 2》

T-Q	Can she use the brake very well?	
S	No, she doesn't.	
T	Can she use?	
S	No, she can't. She can't use the brake very well.	
Display / Referential		(turn の数) 1

3.3 結果・考察

Table 1 は英語教師 6 名の授業における DQ と RQ の回数、発問総数、および DQ・RQ 毎の生徒の平均 turn 数である。

Table 1 DQ、RQの頻度、発問総数、平均turn数

	Teacher						Total
	A	B	C	D	E	F	
Frequency of DQ	86	41	38	8	30	35	238
Frequency of RQ	7	3	27	41	20	1	99
Total Number of Questions	93	44	65	49	50	36	337
Average Number of Turns per DQ	0.965	0.927	1.026	1.125	1.133	1.000	1.000
Average Number of Turns per RQ	1.000	1.667	1.000	1.244	1.150	1.000	1.152

結果 1 : 教師の DQ と RQ の使用頻度

χ^2 検定の結果、DQ が RQ よりも多いことが示された ($\chi^2=57.332$, $df=1$, $p<.01$)。Long and Sato (1983) の指摘は日本の英語授業にも当てはまる。

結果 2 : DQ か RQ かによって学習者からの応答量は異なるか

Table 1 にあるように、全体として DQ の場合が 1.000 回の平均 turn 数、RQ の場合が 1.152 回の平均 turn 数であった。t 検定の結果、RQ の方が生徒の turn 数をより多く引き出すことがわかった ($t=2.882$, $df=335$, $p<.01$)。

以上の結果から、英語教師の発問は DQ の方が RQ よりも多いが、RQ の方がより多くの turn が生じているといえよう。このことは教室実践において、より多くの RQ を生徒に尋ねることによって、より自発的な interaction が生まれうることを示唆している。

4 自発的 output を促す指導

実際に授業を実施していると、確かに RQ の方が DQ よりもより会話をはずませる可能性をもっていることは実感する。しかし、RQ を発しさえすればどの学習者からも十分な応答量が得ら

れるわけではない。では、訓練によって、その応答量は増加しうるのであろうか。この問題を検討するために、2ヶ月間の実験的授業を行った。対象は大学生である。クラスAにはRQへの「答え方」を訓練した。クラスBには指導しなかった。2ヵ月後に以下のような「応答力テスト」を両クラスに実施した。

4.1 応答力テスト

指示は「今から言う質問に対して、できるだけたくさんを英語で答えなさい」であった。以下の10問のYes/No Q(すべてRQ)を教師がライブで発する。それを聞いて、一斉に各自のテープに応答を吹き込む。応答時間は各問15秒(タイマー音で知らせる)。Qは訓練には含まれていなかった質問である。2001年7月に実施した。

- Q1 Do you usually get up early?
- Q2 Is there a clock in your room?
- Q3 Do you play tennis?
- Q4 Are you the tallest in your family?
- Q5 Do you speak French?
- Q6 Can you drive a car?
- Q7 Does your mother drink beer?
- Q8 Do you like summer?
- Q9 Did you eat bread this morning?
- Q10 Are you going to cook dinner tonight?

上述の授業ビデオの分析では1つの発問に対するturnの数を測定したが、この実践ではすべての学生の応答量(「新情報を含んだ節」、詳細は後述)を測った。訓練形式の容易さ、LLという学習環境、2群を比較するという実験形式などの理由から、測定変数は双方向の会話で生じるturnではなく、一方向的な応答量とした。

4.2 対象

クラスA:(訓練実施クラス)一般教育の英語受講者(学校教育課程2年生、非英語専攻)、有効データ41名。

クラスB:(上記の訓練は与えないクラス。ただし、コミュニケーション活動やゲームなどのインタラクティブな活動は頻繁に行ってきた)一般教育の英語受講者(情報社会文化課程1年生)有効データ49名。

なお、両クラスの英語力はほぼ同等であると考えられる(英検準2級又は2級保持者は両クラスともに40%であること、及び過去のリスニングテストのデータなどから判断した)。

4.3 クラスAの訓練方法

毎週1回の授業(90分)の始め約20分間を訓練に充てた(残りは通常の授業内容)。応答のポイントを聞く→LLを使って、教師のRQに指示された形式で応答し、それを録音する→自分の録音を聞く、という順序で計8週間に渡って指導した。RQはすべてYes/No Q形式である。

【Appendix】に訓練の概略を示した。その中で、Practice1つが1回分の訓練に相当する。

4.4 応答の分析手順

「応答の中に『新しい情報を述べた節(clause)』はいくつあるか」をカウントした。以下の手順によって分析を実施した。

- ①すべての応答の逐語記録を作成
- ②節をマークする
 - ・主語と動詞がある場合は常にマークする

・動詞（特に be 動詞）を落としていても、主部と述部があると判断できるものはマークする。

・断片的の語句であっても、文脈から主語・動詞が再現できる場合はマークする。

◇Do you like summer?

◆Yes, a little.

③その節が「新しい情報」を提供しているかを、1点か0点で判断する。時制の誤りなど文法的観点からは判断しない。

・肯定か否定かのみを示す語句・文は0点とする。

◇Do you play tennis?

◆Yes. (0)

◆Yes, I do. (0)

・質問のオウム返しの節は0点とする。

◆Yes. (0) I play tennis. (0)

◆Yes. (0) I play tennis after school. (1)

以上の手順をふんだ採点例をいくつか示す。

◇Did you eat bread this morning?

◆Yes. (0) I sometimes eat bread, breakfast. (1) I eat...(0)

◇Are you the tallest in your family?

◆My father is. (1)

◇Do you play tennis?

◆Yes, I do. (0) When I was junior high school student (1), I, I belong to tennis club (1) and I play tennis(1).

◇Does your mother drink beer?

◆Oh yes. (0) My mother drink beer every night (1), so my mother talk me (1) you can drink beer(1).

4.5 採点の信頼性

20人分の応答例計200サンプルについて、2名の採点者が独立に採点したが、その一致度は94%であった。そこで、残りは1名が通して採点した。

4.6 結果

Table2に両クラスの応答力テストの結果を示す。訓練を受けたクラスAは質問1つに関して平均1.31個の「新情報を含んだ節」を言い、受けなかったクラスBは1.09個の節を言ったという結果である。この差は有意であった ($t(88)=1.99, p<.05$)。

Table 2 Yes/No Q10 問に対する「新情報を含んだ節」の数

	人数	平均	標準偏差
クラスA	41	13.12	3.31
クラスB	49	10.92	4.82

よって、訓練によって応答量は伸びると示唆される。

しかしながら、今回比較したクラス(クラスB)には応答の仕方を意識させた練習機会自体を与えてきていない。したがって真の比較実験ではない。クラスBにクラスAと同等の長さの練習時間を(指導は行わずに)与えれば指導法の効果を検証しうる。しかしそのような対照群を長期に設定することは実践上困難を伴う。

5 まとめ

我々の研究ははじめに紹介した授業ビデオを見たときから始まった。教師の英語は流暢だが生徒からの応答は貧弱であるという授業が多い中で、その授業では生徒が自発的に会話を発展させていた。そのような自発的 output を促進する筋道として、先行研究及びわが国の授業ビデオの分析から Referential Questions の有効性を示唆したが、さらにそれへの答え方を練習することによって自発的発言は増大するという方向性を提案した。

分析においては DQ か RQ かの判定に迷うケースが生じたり、測定の尺度として何がもっとも適切か (Foster and Wigglesworth, 2000) という問題も課題として浮き上がってきた。また、始めから RQ への応答を訓練するよりも、むしろ DQ への応答表現を基礎的なものから発展的なものへと訓練することによって turn 数を伸ばし、RQ への応答にスムーズに結びつけるという筋道も考えられる。さらに実験的・実践的に究明していきたい。

(注)

ビデオは、ジャパンライム発行のもの4本(授業者は佐藤敏子、太田洋、原田博子、小柳守生の各氏)、TDK コア発行のもの1本(授業者は大内由香里氏)及び長勝彦氏の平成8年度東京都中英研の公開授業(ある研究会で入手)である。

《参考文献》

- Brock, C. (1986) "The Effects of Referential Questions on ESL Classroom Discourse", *TESOL QUARTERLY*, Vol.20, No.1, March 1986, pp.47-59
- Foster P., Tonkyn A. and Wigglesworth G. (2000) "Measuring Spoken Language: A Unit for All Reasons", *Applied Linguistics*, Vol.21, No.3, pp.354-375
- Long, M. and C. Sato (1983) "Classroom Foreigner Talk Discourse: Forms and Functions of Teachers' Questions", Seliger, H. W. and Long, M. H. (eds.) *Classroom Oriented Research in Second Language Acquisition*, Newbury House, 1983, pp.268-286
- Nunan, D. (1987) "Communicative language teaching: Making it work", *ELT Journal* Vol.41, No.2, April 1987, pp.136-145
- Richards, J.C. and C. Lockhart (1994) *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*, Cambridge, pp.185-187
- Wu, K. (1993) "Classroom Interaction and Teacher Questions Revisited", *RELC JOURNAL* Vol.24, No.2, December, pp.49-68

[Appendix] 応答力訓練の概要：訓練の総復習の際に学生に配布したプリント

英会話上達の秘訣

マル秘テープによる応答練習

A そっくり繰り返そう：応答の第一歩

■Practice1--Be 動詞

Are you busy today?

Yes. I am busy today.

No. I'm not busy today. (No. I am not busy today. でもよい)

■Practice2--一般動詞

Do you have a pet?

Yes. I have a pet.

No. I don't have a pet.

■Practice3--Be 動詞または一般動詞

■Practice4--過去形 (Be 動詞または一般動詞)

Were you angry then?

Yes. I was angry then.

No. I wasn't angry then.

Did you have a test yesterday?

Yes. I had a test yesterday.

No. I didn't have a test yesterday.

B 新しいことを付け加えよう：豊かな応答目指して

■Practice5--程度を加えよう

(好み・興味)

Do you like natto?

Yes. I like natto very much. (a little).

No. I don't like natto very much. (at all)

(能力)

Can you use a computer?

Yes. I can use a computer very well. (a little)

No. I can't use a computer very well. (at all).

■Practice6--頻度を加えよう

Do you go to a karaoke-house?

Yes. I sometimes go to a karaoke-house. (usually→often→sometimes)
Yes. I go to a karaoke-house every day. (every Saturday, once a week, three times a month)

No. I seldom go to a karaoke-house. (rarely=seldom→never)

■Practice 7--時 (午前/午後など) や場所を告げよう

Do you read the newspaper in the morning?

Yes. I read the newspaper in the morning. (そのまま繰り返し例)

Yes. I read the newspaper in the morning. Do you read the newspaper in the morning? (繰り返し+質問返し)

* 「質問返し」は特に新しいことを言わなかった場合に有効な手段

Yes. I sometimes read the newspaper in the morning. (頻度を加えた例)

No. I read the newspaper in the evening.

Do you eat dinner at home?

Yes. I usually eat dinner at home.

No. I (often) eat dinner at a small restaurant.

■Practice 8--例や正解を告げよう

Are you from Fukuoka-ken?

Yes. I'm from Hakata. (例)

No. I'm from Saga-ken. (正解)

Do you usually eat breakfast?

Yes. I usually eat bread and coffee. (例)

No. I seldom eat breakfast. (正解)

Do you have a car?

Yes. I have a small car. (例・詳細)

No. I have a bike. (正解)

No. My father has a car. (正解)

C 相手の答えに応じてあげよう

Is that right? ↓ Is that right? ↑

Is that so? ↓

Really? ↓ Really? ↑

I see. ↓ Are you sure? ↑